

金の宮——靈異記における他界——

守 屋 俊 彦

日本靈異記中巻第七縁はさまざまな問題をはらんだ話となっている。まず、この話は智光と行基との対立のことからはじまっている。

智光は鋤田寺の沙門であった。生まれながらに賢く、いろいろの経の注釈書を作り、「諸の学生の爲に、仏教を読み伝」える程の「智恵第一」の高僧であった。それだけに智光は自ら侍むところがあったのである。一方、行基は、仏法を弘め、迷える衆生を指導し、「内に菩薩の儀を密に」していたけれども、外形は低い修行僧の姿をしていた。ところが、聖武天皇はこの行基の「威徳に感」じて「重みし僧」じ、遂に天平十六年十一月に大僧正に任ぜられた。自ら侍むところのあった智光は嫉妬し、「吾はこれ智人、行基はこれ沙弥、何の故に天皇、吾が智に幽せず、ただ沙弥を替めて用ゐ給ふ」と非難した。すると忽ちにして病にかかり死亡した。つまり、彼は口業の罪によってえんら王に召されたのである。この話の原点は、

終りの方に、「口は身を傷ふ災の門、舌は善を剪る鋸鉞なることを」と説いているように、恐らくは口業の罪の恐ろしさを語ることにあつたのであろう。智光程の高僧にしても、なお口業の罪に堕ることがある、まして凡人をや、ということになって、このことを説くのは、きわめて効果があるからである。しかし、智光の相手役が行基になつたところから、この意図は背後に押しやられ、むしろ行基を前面に押し出す方に力が注がれることになつてしまつたのである。蘇生した智光は、自らの罪を行基の前に懺悔するのだが、行基は「顔を和げ嘿然」つたという。ここには嫉妬の情にとらわれた智光に對いして、行基が人間的に一段上にあつたことを語ろうとする意図があらわにうかがわれるのである。靈異記では、行基は僧の理想像として画かれ、高く讃仰されている。こはそのもっとも典型的な場合である。それは「これより已來、智光法師、行基菩薩を信じ、明に聖人なることを知る。」ということばに端的にあらわれている。

それはともかくとして、こうして智光はいよいよ地獄巡りをする
ことになるのである。ここには靈異記の他界観がさまざまな側面を
のぞかせているので、この話をあれこれと分析しながら論を進めて
みたい。まず、智光がえんら王に召されて行ったところ、「前路に
金の樓閣」があったという。この金の樓閣は、この後のところでは、
「金の宮の門に至り」「慈神その金の宮に廻りき」というように金
の宮と書かれている。靈異記では、一般的には金の宮(上三十、中十
六、下二十二)と表現されている。それはこの話の中に「黄金もて
宮を造れり」とあるように金で造られた宮殿であるからである。と
ころで、この金の宮は「当に知るべし、行基菩薩の米り生まれむと
する宮なり」とあるように行基が選んで行くところであった。行基
は、今述べたように靈異記では僧の理想像としてもっとも敬慕され
ている人物であった。「明かに聖人」といわれる程の人物が選んで行
くところなのだから好ましいところであったに相違ない。げんに智
光が蘇って行基の前に懺悔し、「大徳の生まれむ処を見」たといった
ところ、行基は「歎ばし、貴きかな」と言ったとある。行基自身そ
こに行くことを望み喜んでいのである。中十六でも、貧しい貧乏
に食を施していた綾君の家主が生まれるところが金の宮であったと
記されている。それは確に好ましいところなのであるが、そののと
ころを今少しはつきりさせてみたい。

この金の宮について一つの手懸りとなるのは、智光が「西に向
かひて往」ったところ、そこにあったとあるように、西方にあった
ということである。だから、彼は蘇生する際には「東に向かひて還
」ってきている。靈異記では、西は望ましき方角となっている。観
音像を完成しないで死んだ老僧観規は、一旦蘇生して弟子達に後事
を託すと、「西に向かひ、すなはち日中の時に命終」っているし(下
三十)、鳥の邪淫をみて出家した僧叡は「大徳と俱に死に、かならず
同に西方に往生すべし」(中二)と願っている。いうまでもなく、
そこに極楽浄土があったからである。道昭法師は西に向かって端座
し、その部屋から光が西を指して飛んで行くとともに死んでいる。
その後のところに「定めて知る、かならず極楽浄土に生まれしこと
を(上二十二)と記しているところによれば、西方に極楽浄土があ
ったことになる。下序にも「西方の極楽に生まれ」とあるし、下三
十九には「西方の安楽の国」とも書かれている。すれば、西方にあ
った金の宮は一応極楽にあるものと考えて置いてよいのではないだ
ろうか。だから好ましいのである。

しかし、靈異記では、必ずしもそうとばかりはいいい切れないよう
である。ここでは、智光を召したえんら王は何処にいいのかどうも
はつきりしない。智光を連れて行った使者が、この宮の門のあた
りで、召した、といったところ、誰かが、お前は智光法師かと問

ね、北の方に向かって行けと言ったとある。この人物は前後の文章からすれば、えんら王のように思われる。すれば、えんら王は金の宮か、或はその近いところにいたのではないかという感じがする。いうまでもなくえんら王は地獄の王である。従って、金の宮は地獄にあるようにもとられるのである。しかし、この後のところでは、そこからさらに北に向かって行ったら、そこに地獄があったと記されている。そこに混乱がみられるのだが、このようにその場所が動いているところに、実は、靈異記の他界についての問題がひそんでいるのである。これは後に述べるように、靈異記では地獄と極楽とが混在し、未分化の状態にあるところからきているらしいのである。

ところで、その極楽であるが、靈異記ではまだ十分に形作られていないようである。極楽について記されているところを拾いだしてみると、―地獄と混在しているが―そこが大体西方にあるということ、そこでは黄金の座（上三十）、金の椅（上三十）、金の札（下二十）（二）、黄金の山（上五）というようにすべてが金で作られているということぐらいのものである。それ以外では、「五つの色の雲あり、宛の如く北に度れり」（上五）とあるにすぎない。もっとも、五色の雲というのは、上二十八の役の優婆塞の語に「毎夜に五色の雲に挂りて」とあるように神仙思想からきているものであるらしい。⁽²⁾このように

みてくると、靈異記の極楽の風景はきわめて貧しいといえる。それは、例えば往生要集に、「講堂・精舍・宮殿・樓閣の内・外・左右にもろもろの浴池あり。黄金の池の底には白銀の沙あり、白銀の池の底には黄金の沙あり、水精の池の底には珊瑚の沙あり、珊瑚の池の底には水精の沙あり。珊瑚・虎魄・車磲・馬瑙・白玉・紫金も亦またかくの如し。八功德の水、その中に充滿し、宝の沙の、映徹して深く照さざることなし」（大文第二 欣求淨土）とあるような絢爛たる幻想の世界とは比較にならないものである。言ってみれば、ここでは極楽はやっと描かれはじめられたにすぎないのである。そして、ここで特徴的なことは、すべてが金色に輝いているということである。いささか冷い感じがなくてもないが、金はまぶしいばかりに照り輝き、きわめて固いところから、極楽にはふさわしいものと考えられたからであろうか。それは恐らくは異国の思想からきているのであるが、極楽を何よりもそのようなものとして描いているところに、形式的な固さがみられるのである。豊かな描写とはいえない。

二

さて、北の方に行けというので、智光が使者について行くと、地獄の熱気が身に当たってくる。そこに鉄の柱が立っている。それを抱

くと「肉皆銷け爛れ、ただ骨殖のみ存れり。」ということになる。さらに北を指して行くと、こんどは熱い銅の柱が立っている。同じようなことを繰り返す。さらに北に行くと阿鼻地獄がある。そこで、「焼き入れ、焼き煎」られた。このように何度も身を焼かれているのは、こうした罰を繰り返して受けることによって、智光が犯した罪の重さを語ろうとしているのであろう。しかも、それは必ずしも強制されたものではなく、「心に近づかむと欲ふ」「なほ就きて抱かむと欲ふ」というように自ら望んで罰を受けている。そこに宗教的な懺悔の姿勢をみることが出来る。このような恐るべき地獄の風景については、これ程ではないにしても、他の二、三の話にも描かれている。下二十二には、「四人副ひて熱き鉄の柱の所に至りて、その柱を抱かしむ。鉄を纏みて熱く焼きて、背に著けて押す。」とあるし、上三十、下三十六にも簡単ではあるが、同じようなことがでてくる。

ここで気がつくことは、極楽と地獄との描写の相違である。いま述べたように、極楽の世界はうっすらと描かれているといった程度である。しかるに、地獄の方は、往生要集程ではないにしても、一応その骨組が出来上りつつある。そこで受ける罰にしても、熱い柱を抱くことのほかに、鉄釘を打ちこまれたり（上三十、下三十六）、鉄杖で打たれたり（上三十、下三十七）、釜に入れられたり（下二十三、下三十五）すでに幾つかの道具が用意されている。死者の罪を裁く

えんら王もいれば（中五）、その使者の鬼もいる（中二十五）。靈異記は応報を説くものである。しかるに、善いことをした者が行ける筈の極楽のことがあまり描かれていないというのはいささか片手落ちのような気がする。悪いことをしたならば、このようなすさまじい罰を受けるのだ、とした方が心理的にはより効果があると考えたからかも知れない。靈異記には、善いことをしたために、現実的な幸福を得た話がしばしば語られている。そこでは、富や地位を得たり、病気が治ったり、恋をすらすらに入れたりしている。教養の低い庶民達には、この現世での幸福を得ることの方が、それがたとい至高永遠の幸福であったとしても、観念的な極楽でとるよりも訴えるところが多かったからであらう。こうしたところからも、極楽の概念がなかなか形成されなかったのかもわからない。

ここでもう一度この話にもどってみたい。ここでは地獄は北の方角にあったことになっている。しかし、靈異記では必ずしも一定はしていないようである。上三十をみると、えんら王に召された膳臣広国に対して、王は、「若し父を見むと欲はば、南の方に往け」と言っている。そこに行ってみると、父が熱い銅の柱を抱き、鉄の釘を打ちこまれ、鉄の杖で打たれている。地獄の罰を受けているのである。これで見ると、地獄は南の方にあったことになって、この話とはまったく逆な方角となっている。靈異記ではその方角は一定して

いないようである。というよりか、方角という概念そのものがまだ十分に出来上っていないようである。靈異記には、地獄を訪れた話が、上三十、中七、十六、十九、二十五、下九、二十二、二十三、三十五、三十六、三十七と十一程あるが、この中方角がはっきりと書かれているのは、上三十、中七の二つにすぎない。他はどちらの方角に行くというのではなく、目をつむったら、いきなりそこに行っていたことになっている。これは方角という概念がまるでみられない記紀の黄泉国のそれに似かよったところがある。

こうした現象は、その位置についてもみられるようである。ここでは、智光は金の宮の前の中へ行き、そこから北に向って行ったところ、そこに地獄があったことになっている。金の宮とは別な場所である。もっとも、それ程遠いところという印象は受けない。ところが、中十九をみると、えんら王は王宮にいたとされている。ただし、その王宮が金の宮であるとは記されていない。これとは逆に、下二十二では、黄金の宮に王がいたことになって居り、この王は多分えんら王であろうと思われるが、はっきりとそのようには書かれていない。その点がはっきりするのは下九の話である。藤原朝臣広足は病にかかり、それを治そうと思って、大和国菟田の郡真木原の山寺で八斎戒をしていた。しかし、遂に死んでしまった。こうして広足はえんら王の関に召されることになった。彼が使について

行くと、道の行く手に楼閣があった。この楼閣について、「炫耀きて光を放つ」と記している。つまり、金の宮だったのである。そこに一人の人がいて、四方に簾をかけて坐っていた。しかし、顔は見えなかった。その人がいうのには、あなたの妻は六年の苦を受けている、後三年残っているのだが、あなたの妻はあなたとともに苦を受けたい、といっているがどうか、といった。広足は、妻のために法華経を写し、供養したい、といって蘇ることになった。彼がついでに思って、その人に、「御名を知らむと欲ふ」と問ねたところ、「我を知らむと欲はば、我は閻羅王、汝が国に地蔵菩薩と称ふはこれなり」と答えたというのである。金の宮の簾の中に坐っていた人はえんら王だったのである。えんら王は地獄の王である。これによれば、地獄と金の宮とは同じ場所にあることになる。中十九や下二十もそのように解すべきであろう。これらの話でみると、地獄の位置は不安定である。

そして、それはまた、地獄と極楽との位置関係ということにもなる。前にみたところでは、金の宮は極楽にあったことになっている。つまり、金の宮を軸にしてみると、どうも、この二つの世界は混在しているようにみえる。ここでは、地獄と極楽は一つに重なり合っているらしい。別な言い方をしてみれば、未分化の状態にあるということにもなる。それが、この中七の話でやや離れたような

恰好になっているのは、この二つの世界が分化してゆく中間過程を示しているものと思われる。だから、えんら王がどこに居るのかはつきりしないような表現にもなっているのである。なお、上三十では、地獄は度南の国にあることになっている。この度南の国というのは、莊子にみえるもので空想上の国名であるとのことだが（大系本、頭注）、「はなはだ謎き国」とも記している。これについて全書本には、「大愛愛すべき国がある。地獄だのにはめてゐるのは説話の変化する過程を見る資料になる。」と注してあるが、地獄が極楽とダブっているところから、そこが愛すべき国ともされたとした方がよいのではあるまいか。⁽³⁾

三

この話の中でもっとも注意を引くのは、この現実の国のことを、「葦原の国に名の聞えたる智者」こは豊葦原の水穂の國なるいわゆる智光法師か「葦原の國にありて行基菩薩を排謗る」とあるように葦原の國といっていることである。これは記紀にしばしばでてくることばである。すれば、この話の背景に記紀的なものがあるのではなからうかということが一応考えられるのである。ところで、この

葦原の國ということばは、記紀では黄泉國と相對關係の下に使われているものである。⁽⁴⁾ その黄泉國とは死者の國のことである。すれば、ここの地獄という世界の中に、記紀の黄泉國の概念がまぎっているのではなからうかということをや想せしめるのである。げんに下三十五、三十七では、地獄のことを黄泉國とも記している。この点からしてとくに興味あるのは、使が智光に「ゆめ黄泉火物をな食ひそ。今は忽く遅れ」といっていることである。黄泉火物というのは、記紀のイザナギノ命の黄泉國訪問神話の条にてくる黄泉戸喫のことである。イザナミノ命は、火神を生まれたために亡くなられた。イザナギノ命は、黄泉國まで出かけて行き、未だ國作りが終っていないのだから還ってほしいと、と願われた。これに対して、イザナミノ命は、「悔しきかも、速く来すて、吾は黄泉戸喫しつ」と答えられたという。黄泉戸喫は共食の一種である。古代人は同じものを一緒に食事すれば、血がつながるものと考えていた。死者の國の物を食べれば、死者の國の人となってしまうのである。従って、最早再び現実の國へは帰ることは出来なくなるのである。だからこそ、イザナミノ命は手遅れだと悔しがり、智光は還るのなら食べるなどといわれているのである。しかも、このことばは記紀のこの場面にしか使われていないものである。すれば、この地獄巡りの話と記紀の黄泉國訪問神話との間に何らかの關係があるだろうということ

は十分に考えられるのである。

それはこの話の中に記紀的なものがあることからいえそうである。智光が金の宮に到ったところ、「その門の左右に二人の神人」が立っていたとある。この神人は一見仏教でいう四天王などのようにもとれるのだが、これは、文字通り神主のことなのであろう。それは、この人物が「額に緋の縷を着」けていることによってもうかがわれる。上一をみると、雄略天皇から雷を呼ぶように命ぜられた小子部栖麻は、「緋の縷を額に着け、赤き幡袴を擎」げて馬に乗っている。雷は神である。神を降ろすために赤い縷を着けたというのは、神に仕える者がそうした風態をしていたということである。だから、この神人は大系本に「下級神祇の名」と注しているようにまさしく神主なのである。それにしても、神主が金の宮の門衛というのはをかしい。そこに記紀的なものがまざっているものとみたい。

なおいわば、上三十と下九の話では、地獄で死んだ妻に会ったことになっている。とりわけ、下九ではその妻は「懷妊して児を産むことを得ずして死」んだことになっている。それはイザナギノ命が、火神を産まれたために亡くなられたイザナミノ命と黄泉国で会われたのと、その発想を一にしている。なお、上三十の「内に入る者は、更に還し出さず」「然れどもゆめ黄泉のことを妾に宣べ伝ふることなかれ」ということばにも黄泉戸喫に似かよったところがある

のではないだろうか。黄泉国の内部を一旦覗いたり、そのことをうっかりしやべったりすると、その世界に引きずり込まれるというような思惟があるような気がする。このようにみえてくると、一般的に言って、靈異記の地獄の背景には、記紀の黄泉国の風景が広々と横たわっているように思われるのである。だから、西郷伯燭氏が「仏教のもたらした地獄の日本的基盤をなすのが黄泉の国であつたのは確かだ」とされているのはこの際従うべき説であらう。もっとも、そこに地獄への萌芽がみられないこともない。例えば、現実の国との境をなしている坂である。靈異記では、「甚峻しき坂」(下二十三)となっている。記紀の黄泉比良坂が記伝に、「平坂」と云は、平易なる意なり」とあるように平な坂であるとすれば、それはやがて、地獄が一万由旬の奈落の底にあるとすることへの第一歩とみられないこともないのである。

ところで、その記紀の黄泉国の風景であるが、それが死体を仮りに納めて置く殯の儀礼の反映であるらしいことはいわれている通りであるが、そこに観念としての死者の国の世界が幾らか出来上りつつあることも否定出来ないようにも思われる。しかし、それは幻想的なものではなく、この現実の国の引き写しにすぎないようである。そこは黄泉比良坂という坂を通して行くことになっている。その坂には大きな石があるし、坂本には桃がある。葡萄や竹の子など

も生えるらしい。また、そこには家があつて、その家には戸もついている（記）。別の異伝によれば、大きな樹もあるし、川も流れてゐるらしい（紀四ノ一書）。これでは坂の向うの隣村といった感じである。ただし、それがどちらの方角にあるのかということは記されていない。一方、靈異記であるが、そこには熱い柱などが立ったりして地獄らしいところもあるが、一般的には記紀の風景とあまり変らない。そこには、まず「次に率しき坂あり」（下二十二）「往く道の頭に甚峻しき坂あり」（下二十三）と坂があり、「坂の上に登りて観れば大きな観あり」（下二十二）「坂の上に登りて躊躇ひて見れば」（下二十三）と、この坂を登ると地獄がある。そこには「行く路広く平に、其きこと墨繩の如」（中十六）き広く真直ぐな路や「椅の本に三つの箇あり」（下二十一）と、三本に分かれた路などがある。この路には「草生ひ荒れ」藪もて塞がる（下二十三）と、草や藪が生えている。また、そこには「路の中に大河あり」（上三十）と、河があり、「椅を度」（上三十）しなどしてある。そして、空には「飛ぶ鳥」（中七）がいたりする。それから金の宮がある。しかも、ここは「二つの駅度るばかり」（上三十）とあるのによれば、それ程遠いところではないらしい。つまりは、少し道具が多いぐらゐいのもので、黄泉国と殆ど変らない。その風景は、どうも記紀の黄泉国という土壌の上に発芽しているように思われる。地獄の方角がまだ十分に定

まっていないうことも、或はそこらに原因があるのかもわからない。

さて、記紀にはもう一つ黄泉国訪問神話がある。オホナムヂノ神のそれである。しかし、ここの死の世界はイザナミノ命の場合とは少し異なっているようである。後者が現実的な死であるのに対して、前者は儀礼的な死である。古代人の思惟によれば、人間が新しく成長してゆくためには、一度死んで生まれ変わることが必要だったのである。それが儀礼的な死である。この話をふくめて、オホナムヂノ神の神話は、若者になるための死と復活、巫医になるための死と復活、そしてその上に王になるための死と復活、この三つの儀礼がモンタージュされて一つの話に構図されているらしい。⁸⁾それならば、靈異記の地獄の画面に、こうした儀礼的な死が投影されているのであろうか。そこでまず考えられるのは、これらの地獄巡りの話には、地獄に行ったきりの、いわば、片道切符の話は殆どなく、その大部分は蘇ってきることである。永遠に地獄で苦しむというのではなく、再び還ってくるという構想には、この儀礼的な死が裏打ちされているとは考えられないうか。さらにいえば、この蘇った人が「これより後邪を廻らして正に趣く」（上三十）「ますます信心を發し誨誑供養しき」（下二十二）と人間的に生まれ変わってきているということである。ここは勿論、仏教的な観点から自らの行為を

反省し、そこから仏教的なものに目覚めてゆくということになっているのだけれど、そこには新しい人間に復活するという思惟が下絵としてあるとはいえないだろうか。また、これらの語では、病氣にかかって徐々に死んでゆくのではなく、「忽率にして死ぬ」(下二二二)病まずして卒爾にして死に(中十九)というようにある日突然に死んだ場合が多い。ここには、ある日を境にして、儀礼的な死の世界に入ってゆくという形式がでているというふうにはみられないだろうか。このようにみると、うっすらではあるが、そこに儀礼的死があるような気がするのである。⁽⁹⁾勿論、一般的に言っているのであって、オホナムヂノ神のそれと直接関係があるというのではない。もっとも、この中七の語で、鉄の柱を抱いて焼かれ、「肉皆銷け爛」れながら、使がやぶれた箒で柱をなで、「活きよ活きよ」といったところ、もとの身になったというのは、オホナムヂノ神が、手間の山本で焼いた大石を抱いて死に、御祖命の助けによって「作り活」きたのといくらか似かよってはいる。それはともかくとして、靈異記の地獄には、記紀の二つの黄泉國の世界——現実的な死と儀礼的な死——が焼付けられているものとしてみたいのである。言ってみれば、現実的な死によって塗り固められ、儀礼的な死によって粹付けされているといった恰好である。

四

ところで、記紀によれば、その黄泉國は海神國と交錯しているところである。イナヒノ命は「妣の國として海原に入」(記)ったという。妣の國は亡き母の行っている世界である。スサノヲノ命は妣の國である根の堅州國に罷りたいと願ったという。その根の堅州國は黄泉國のことである。だから、イナヒノ命は、海原にある黄泉國に行ったことになる。そういえば、海神國の風景は黄泉國のそれと殆ど同じことである。そことの境に海坂があり、そこには路も通っている。この道を往くと宮室があり、その門の傍には香木が植えられている。海の中だというのに井まである(記)。それは、この現実の國の引き写しであり、黄泉國がその上に灰色が塗ってあるのに対し、こちらは水色が塗ってあるにすぎないのである。ただ、黄泉國が暗く忌むべきところであるのに対し、こちらは明るく楽しいところとなっている。その明るく楽しいところから、この海神國はさらに常世國と交錯してくるのである。常世國は永遠の生命と幸福のある理想境である。ミケヌノ命は「波の穂を眺」(記)んで常世國に渡ったという。この國が海洋國なので、こうした理想境を海の世として把握したのであろう。「鰐の広物・鰐の狭物・沖の藻葉・

辺の藻葉、尽しても尽きぬわたつみの園は、常世と言ふにふさはしい富みの国土⁽¹⁰⁾」だったのである。記紀では黄泉國と常世國、この二つの世界が、海神國を中に置いて一つに重なり合っているのである⁽¹¹⁾。つまり、そこでは、もっとも忌むべきものと、もっとも望ましきものとが一つに混在しているのである。

さて、靈異記の他界としては地獄と極楽とがあった。しかも、そこで特徴的なことは、地獄の描写が詳しく、極楽があまり描かれていないということであった。さらにいえば、その地獄の中に、実は、極楽が混在しているということであった。そこでは、地獄と極楽とが一つに重なり未分化の状態にあったのである。それは、仏教の地獄、極楽という他界観が十分に定着していないところからきているのであろうが、しかし、今みてきたように、地獄の背景に記紀の黄泉國の概念があるとすれば、こうした未分化ということそのものも、黄泉國と常世國とが混在している記紀の他界観を土壌としているところからきているとはいえないだろうか。そして、この地獄、極楽という二つの世界がそれぞれに絢爛たる幻想の世界を開いてゆくのは、往生要集をまたねばならなかった。ということは、靈異記の他界は、記紀の他界と仏教のそれとの接点にあったということにもなるのである。金の宮は、黄泉國の殿や海神宮の上に、仏教的な金色を塗りあげて作られたものであった。そういう意味にお

いて、金の宮は靈異記の他界の象徴ともいえるのである。

そして、それはまた景戒自身の心の中の映像であったといえようである。彼は僧なのだから、地獄や極楽を信じていたに相違ない。しかし、中二十五や下三十八にみられるように、彼は魂と肉体の分離を素朴に信ずるような、いわば、記紀的な世界にも住んでいたのである。歌謡がある事件の前兆となることを熱心に語ったりもしている(下三十八)。そこから、彼は知識としては仏教的な他界を信じ、生活的には記紀的なそれを信じていた、というようなことを考えてみたいのである。つまり、彼の心の中に二つの異質な他界が混在しているのである。それは、恐らくは彼が自度僧という、僧でありながら、一方では在俗の庶民生活を送っていた、というようなところからきているとはいえないか。すれば、金の宮は、この仏教と俗世間という、二つの世界に生きた彼の心象風景だったともいえるのである。勿論、これらの話がすべて景戒によって書かれたというのではない。しかし、少くとも彼によって編纂されたのだから、そこに景戒の息がかかっていることも否定出来ないものである。だから、このような見方も或は出来るのではないだろうか。

注(1) 拙稿 日本靈異記小考 三—中巻第八縁—「神道学」第六

十八号 五四頁—五五頁

(2) 八木 毅氏 日本靈異記における地獄「愛知県立女子大学・愛知県立女子短期大学紀要」第十四輯 二十三頁

なお、この八木氏の論文は、靈異記における地獄を、主として仏教の面から詳しく論じられたものである。いろいろと教示を得た。記して謝意を表する。

(3) この度南の国について岩本裕博士は、インド神話でえんま王が南方にいとされているところから、この話の中の、南方に行つて父をみてこい、という所伝とともに、「度南という国名がインドの所伝と関係があるとすれば面白いが」という興味ある説を提示されながらも、「現在の著者には度南という語のなりたちをたどることができない。」とされている（「極楽と地獄」三一新書 一四七頁）。

(4) 倉野憲司博士 古代人の異郷観（「古典と上代精神」所収）九七頁

(5) このことについては、すでに早く武田祐吉博士が指摘されている（異郷神話「国文学研究 神祇文学篇」所収 二三八頁—二四〇頁）。全書本ではさらに発展させ、「死者の行く世界を訪れて、死んだ妻に逢ふといふことは、伊邪那岐の命の黄泉訪問説話と、本書の上巻第三十条、下巻第九条の説話とに於いて共通するところである。さうして伊邪那岐の命の黄泉訪問の説

話では、伊邪那美の命は火の神を生まれたために黄泉に赴かれたのであり、本書下巻の藤原広足の説話でも、懷妊して子を産むことを得ずして死んだ妻が地獄に行ったことになってゐる。

この説話の源は、大陸であつて、仏教説話となり、ただその渡来に新古の差別があるものと考へられる。古く入つて来たものは、日本に於いてもある範圍に語り伝へられてをり、そこに更に新しい渡来を迎へ入れて、かやうな地獄説話が幾通りにも伝へられるに至つたのであらう。」と解説されている（四三頁—四四頁）。

(6) (7) 西郷信綱氏 古事記の世界 岩波新書 五六頁、五〇頁。

(8) 拙稿 日本神話の成立「歴史教育」第十四巻 第四号 十二頁

(9) 靈異記の地獄巡りと儀礼的な死との関係については、「地獄巡りの話—記紀と靈異記—」と題して口頭発表したことがある（昭和四十六年四月武蔵野・甲南国文学会）。稿を改めて論じてみたい。

(10) 折口信夫全集 第二巻 九頁

(11) これら三つの世界の関係については、倉野憲司博士が、前掲論文において詳しく論じられている。参照すべきであらう。